

氏 名 陳 夏 晗

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1397 号

学位授与の日付 平成 23 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学専攻  
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 現代東南中国における宗親会の民族誌的研究－国家との  
関係を中心として

論文審査委員 主 査 教授 田村 克己  
准教授 野林 厚志  
准教授 横山 廣子  
教授 吉原 和男 慶應義塾大学  
教授 潘 宏立 京都文教大学

## 論文内容の要旨

1980年代以降の30年間、中国は急激な変化を遂げてきた。特に改革開放のもとで、政治、経済、文化のあらゆる面が急速に変化している。本論文で論ずる1990年代以降の宗親会の復興や活発化は、そのうちの一つである。

宗親会とは、「同姓＝父系血縁」イデオロギーのもと、同じ姓を有することを根拠に便宜上の共通の祖先を立て、その祖先への祭祀を通して集団意識を維持する擬制的父系親族の社会結合である。成員権が生まれつき決まる宗族とは異なり、宗親会は任意加入の社会組織である。宗親会の結成目的は、同姓一族の勢力拡大や、同姓者の相互扶助、親睦促進、情報交換、ネットワークの拡大を図るところにある。

中国人にとっては、父系血縁は社会制度上重要であり、血縁に基づいた親族関係や組織は、中国社会の人間関係や社会構造の骨格を形成するものである。したがって、伝統的な父系親族関係や組織の変容を解明することは、この古くて新しい中国の社会変化を理解し、その未来を把握する鍵の一つとなる。そのために、筆者は、擬制的父系親族組織である宗親会を研究対象にしたのである。

これまでの研究は、宗親会の血縁関係、形成理由、メンバーシップ、宗親会と宗族の組織関係、祖先崇拜と国家との関係に言及し解明してきたが、一方で、それらの先行研究には、以下の二つの欠点があげられる。まず、宗親会を宗族原理と比較しながら、宗親会の形成要因、特徴、構造などを指摘するに留まり、宗親会と地域社会、個人との関連、各歴史時期における社会的・経済的・政治的状況に応じた宗親会の変動の様子については、ほとんど検討されていないことである。次に、宗親会と国家との関係が十分には論じられていないことである。

本論文は、福建省南部石獅市の事例に基づき、各時代の宗親会の状況を歴史的に検討したうえで、近年の社会的・経済的・政治的変動に応じた宗親会の復興過程と動態を、国家との関係を中心に、個人、宗族、地域社会との関連を視野に入れて解明するものである。

本論文は、序章、五つの章と終章の合計七章から構成されている。

まず、序章では、中国本土及び海外の華人・華僑社会の宗親会に関する先行研究を整理し、その成果と限界を批判的に検討した上で、自らの研究の焦点、方法論を提示する。

第一章では、歴史上の各時代の宗親会の結成過程と様態を明らかにし、さらに宗親会と国家の関係を解明する。これは1990年代以降、宗親会の復興過程と様態に関する研究分析の基礎となり、歴史的視点を提供するものである。

第二章では、1990年代以降の福建省南部地域の宗親会の復興過程と様態を考察し、また、宗親会に対する政府の新しい文化・行政政策の具体的な内容を明らかにし、現在の宗親会と国家の間にできた新たな共存、競合の関係の構造を分析する。具体的には、現在、政府が、一部の宗親会に対する寛容な政策を取り、その一部の宗親会を「某遠祖の学術研究会」という名称で認めると同時に、宗親会を政府管理のもとに置いている。

1990年代以降に復活した福建省南部地域の宗親会は、1949年以前の宗親会の単なる複製ではない。今日的な社会、経済、政治的諸条件に応じて、宗親会の構成原理が継承されながらも、新たな「伝統」が創造されている。これは、主に宗親会役員の指導力の確立メカニズムと、宗親会の機能、宗親会の祖先崇拜の表象という三つの点に現れている。

第三章では、宗親会役員の指導力の確立メカニズムの変化を考察する。この考察を通して次のことを明らかにする。現在、宗親会の役員たちは、同姓一族の利益を代表するものとして、同姓宗族の承認と宗族勢力の支持という後ろ盾を得て、権威の基盤を固めている。同時に、政府という後ろ盾も権威を高めるために利用しつつ、政府の管理や指導も受けている。すなわち、宗親会の役員たちは、ローカルな宗族と密接な関係を持つものでありながら、政府とのつながりを持つものでもある。彼らは、このような多層的な立場を活かして、地域社会における影響力を持つ一つの民間的権威として、さまざまな社会的役割を果たしている。

第四章では、宗親会の機能の変化を明らかにする。まず、政府の管理のもと、地域社会の安定を前提にした紛争解決の役割について考察する。次に、宗親会の「学術研究」の内容を分析したうえで、宗親会が、自らの「社会団体」の資格維持のために、政府に求められた「学術研究」を行うようになったと同時に、「学術研究」の内容を積極的に同姓一族の集団意識の強化に生かしていることを分析する。さらに現在、宗親会は、宗親会の役員にとっての経済的利益の実現の基盤となっている一面も現れるようになった。筆者は、具体的な事例を通して、個人の経済的活動の次元での宗親会の資源とネットワークの活用を解明する。

第五章では、宗親会の祖先崇拜の儀礼表象の変化を解明する。1990年代以降の宗親会の祖先崇拜には、「孝」を抜きにした国家の祖先崇拜の解釈が受け入れられていることと、祖先崇拜と祖先歴史の解釈に政治的用語が見られることという二つの側面があることに注目する。それにより、宗親会は、祖先崇拜を通して、同姓一族の団結をはかりながら、政府と同調し、政府政策を支持する姿勢をアピールしていることを明らかにする。これは、政府に管理されている宗親会にとって、必要な生存戦略であると考え、それによって、自らの正当性を維持しようとしているのである。

上記の三つの点から、国家との関係に機敏に対応する宗親会のさまざまな現代の変化を考察してきた。三つの変化から、宗親会と政府の関係は、次のようにまとめることができる。宗親会は、同姓一族の利益代弁者であると同時に、政府の指導や管理を受け入れ、各行政単位レベルの国家権力と、影響力の競合と譲歩のバランスを取ることを余儀なくされた。宗親会は、同姓一族の利益と政府の間のバランスを取ろうとしている。両者の間のバランスの不一致が生じた場合、宗親会は、対策を考え、両者のバランスを取り戻すための行動を取るようになる。

一方、宗親会は、同姓一族の利益団体としての性格を依然としてもっている。現在の中国の農民には、社会の不安定要素の高まりのなかで、何らかの共同体に帰属・依存したいという心理と、また個人に対する社会の制度的な権利保護の不備から、宗親会のような自分の権利や願望を代弁させる組織・代表を創出したいという意識が存在する。地域社会の人々の意思に基づいて、宗親会の役員たちは、そのような民意を読み取り、同姓者の願望をある程度代弁している。これが、宗親会の役員たちの権威の民間の支持基盤になる。

このように宗親会には、同姓一族の代弁者的性格が見られるが、しかし同時に、宗親会は、外部とのつながりを重視し、以下のような三つの新たな分野で外部とのつながりを広げていく。一つ目は、宗親会は、「学術研究」の内容を積極的に同姓一族の集団意識の強化に生かしているが、これらのことを地域社会の伝統文化研究の一つとしてアピールし、

積極的に地元の博物館や文化館などのような文化研究機関との交流をはかっていることである。二つ目は、宗親会は、宗親会の外に向けて、社会全体の福祉分野での新たな展開を行っていることである。三つ目は、宗親会は地域社会の教育事業に関与していることである。

上記のような活動を通して、宗親会は、より大きな範囲の公共空間に自らの存在を位置させている。これは、明らかに、昔ながら擬制的父系親族の共同体である宗親会を超えて、現代の宗親会と全体社会とつながっていることを提示している。これは、宗親会の今日的变化に関する研究において注目すべきところでもある。

## 博士論文の審査結果の要旨

本論文は、現代中国の擬制的父系血縁集団である宗親会について、福建省南部の事例にもとづき、歴史上の検討をふまえ、近年の社会的、経済的、政治的変動に応じた復興過程とそのあり様を民族誌的に記述している。そして、国家との関係を中心に、地域社会・宗族、そして個人がいかに関親会の復興過程に関わっているかを論じたものである。なお本論文では、宗親会とは「同姓＝父系血縁」のイデオロギーにもとづき、便宜上の共通の祖先をもつ同姓の人びとによる、任意加入の社会組織とする。

本論文は、序章での先行研究の検討や、研究の視座、及び方法論の提示をふまえ、第1章と第2章で、王朝時代から1990年代以降の現代に至る歴史を4つの時代区分－1911年以前の王朝国家時代、1911年から1949年の中華民国期、1949年の中華人民共和国成立から1990年代まで、1990年代以降－に分け、それぞれにおける宗親会と国家との相互関係を分析している。

第3章から第5章にかけては、三つの側面から、近年の宗親会の変容のあり様を解明する。すなわち、第3章では役員のリダーシップを扱い、そこに国家的権威と民間的権威とが併存していることを明らかにしている。第4章では具体的事例を通して宗親会の機能の変化について論じており、地域の紛争解決という伝統的な機能の他に、学術研究や経済活動の促進という新しい機能が担われていることを述べている。ことに豊富な事例に基づく経済的役割の議論は、市場経済化にともない個人がいかに関親会の資源とネットワークを活用しているかを十分に描きだしている。第5章では、宗親会の祖先崇拜が論じられ、それによって、同姓一族の団結を図りながら政府政策に同調し生き延びる戦略が見られることを明らかにしている。

以上を受けて、終章では、現代の宗親会が、国家との関係に対応して復興発展を遂げており、その機能を変容させているとともに、個人の選択行為が重要になっていると結論づけている。そしてそれが、従来からの地域社会においての同姓一族の利益代弁者という枠を越えて、社会全体とのつながりを広げていく方向性をもつことを述べている。

本論文は第一に、中国人による中国社会の研究として、およそ1年半にわたる現地調査と、それによって得られた豊富な一次資料にもとづく民族誌として高く評価される。

第二に、「宗親会」の語そのものは、もともと海外華人が主に姓を同じくする人々の相互扶助団体をさして言ったことにはじまるが、現代中国国内におけるその実態を詳細に論じ、さらに歴史的に遡って、同様の組織の存在を論じたことは、宗親会研究、ひいては中国の社会組織の研究の空白を埋めるものとして大きな価値をもっている。

第三に、国家との関係を論じ、他方で個人の選択行為の視点を導入していることによって、宗親会を、国家と個人や地域社会・宗族との間のインターフェイスとして位置づけ、権力主体とのさまざまな交渉を明らかにすることとなり、個人と権力をつなぐ研究としての意義をもっている。

第四に、国家の政治的、経済的、文化的動向をふまえ、それに対応する民間の動きを論じることで、近年の中国社会のローカルな動態を活写する研究としても意味がある。

他方で、本論文には、幾つかの議論すべき点がある。第二の評価と関わることであるが、新中国成立以前から、実態において宗親会に相当するものがあつたとしても、当時の同姓

宗族の連合体と現代の宗親会との比較が十分に検討されていない問題がある。しかし、この点は今後の研究を進めることにより、文献資料の少ない歴史的状況を現代から照射する可能性をもっているといえよう。

また父系血縁の観念にもとづくという男性優位の組織について、ジェンダーの観点を導入することも、今後の研究の展開として期待される。さらに広東省など東南中国の他の地域との比較、地域社会の宗族集団と宗親会との関係の多角的な分析、父系イデオロギーのもととなっている「孝」の観念の精緻な検討なども、これからの研究の課題である。

本論文は、その構成や論理性、また提示されている資料的価値においても、評価されるものであり、上に述べた点をふまえ、本論文が博士学位論文に相当のものであると結論づけ、全員一致で、博士の学位を授与するに値すると判断した。